

1 6 在外教育機関に学ぶ日本人高校生のキャリア意識

研究代表者 岩崎 久美子（生涯学習政策研究部 総括研究官）

① 研究の趣旨，ねらい

【趣旨】

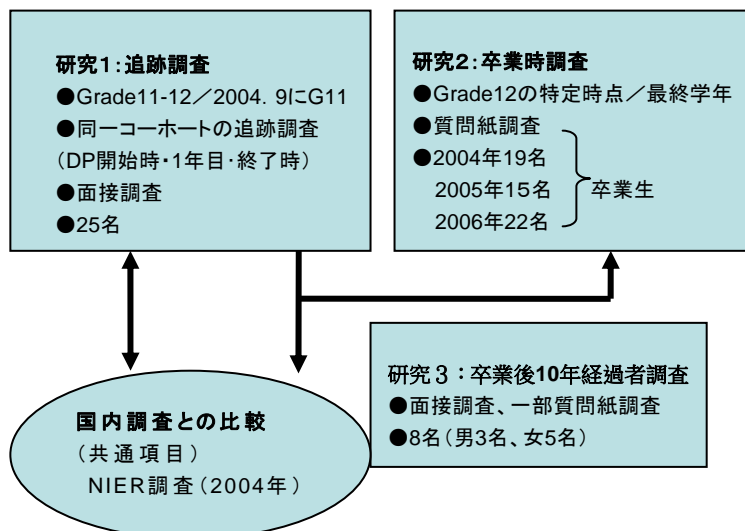
欧州の3つの国際学校(アムステルダム国際学校、デュッセルドルフ国際学校、パリ国際学校)の協力により、国際バカロレア (IB) ディプロマ・プログラム (DP) を受講する日本人高校生を対象にした調査を実施し、その結果から IB ディプロマ・プログラムの教育効果、外国での生活、日本人としてのアイデンティティが進路・就職などのキャリア形成にどのように影響するかを検討する。

【IB/DP カリキュラム】

- ・ 6つのグループ（第一言語、第二言語、個人と社会、実験科学、数学、芸術と選択科目）からの上級レベル3～4科目、標準レベル2～3科目の自由選択科目と3要件（課題論文、知識の理論（TOK）、創造性・活動・奉仕（CAS））から構成される。
- ・ 各科目では、単元ごとに文献購読の課題、テーマに基づく議論、実験レポート・エッセイ提出など論理性と思考力を重視した教育が行われる。

【方法】

- （1）在校生面接調査（追跡調査：年1回×3回）
- （2）卒業生質問紙調査
- （3）日本帰国卒業生（卒業後10年程度経過者）面接調査



【ねらい】

上記 IB プログラム教育効果、異文化経験などに注目し、キャリア・パス、キャリア意識将来設計への影響との因果関係を明らかにする。

②研究成果の概要

【獲得された資質・技能】

- ・生徒は、英語による実験レポート、エッセイなどの提出、社会奉仕活動などの課題遂行のため相当量の勉強や実践を行い、プログラム終了時には「時間管理能力」「忍耐力」、達成感、高い自尊感情を得ている。
- ・エッセイ、論文執筆への丁寧な個別指導により、文章力、思考力、プレゼン能力が高い。
- ・海外滞在年数に関わらず語学力への自信は総じて高くない。ネイティブレベルの外国人との比較で要求水準が高く、英語が流暢であるとの国際学校に対する日本社会のイメージとの間に葛藤を持つ者が多い。
- ・日本の教育について、数学のレベルの高さ、中学校での部活の楽しさなど評価している。

【日本人アイデンティティ】

- ・日本人アイデンティティの根拠を「国籍」「血統」「行動様式・思考形態」に求めたところ、「国籍」（形式要件に依存）と回答する者が多かった。幼少時から一国で継続滞在した現地校経験者に日本人アイデンティティが希薄な者（“姿だけの日本人”）が多い。
- ・日本語 A1（母国語としての日本語）クラスは日本人が集まる場であり、日本人の内集団とアイデンティティを強化するよう作用、外国生活の中で情緒安定の場となっている。
- ・インターネットなどにより外国にいながら日本の情報に表層的・かつ多量に接触。また狭い日本人社会の情報流布と圧力に左右されている。

【キャリア・パス】

1) 大学進学

- ・多くは父親の海外赴任に伴う 2、3 回目の外国滞在。6 月卒業後日本で予備校に通学、9 月入学制度を持つ私大等への進学を希望する（多くは大学・就職ともに日本）。
- ・外国の大学進学希望者は、幼少時アメリカ・フランスの現地校に通った現地校滞在経験者で実学・技術向上目的の進学（工学、フルート、バレーなど）が主たる要件である。
- ・IB プログラムの日本での評価、大学入試担当者の認知度についての不安が高い。
- ・進路選択は、教員の進路指導（パリ）、保護者の選択と現地の塾の情報（デュッセルドルフ、アムステルダム）に依拠している。
- ・日本の大学（法律・経済など）進学後、マスプロ教育に失望する者が多い。

2) 就 職

- ・男子は日本企業へ就職後海外赴任を希望。一部、国際機関や NGO への就職希望者がいるが、いずれも日本人としての立場での外国滞在を希望する。
- ・女子の多くは、結婚後仕事継続の意志は薄い。企業派遣の父親と専業主婦の母親のパターンか専業主婦志向が強い。

③中期目標との関連性（政策立案への貢献可能性）

- ・日本政府は昭和 54（1979）年以降 IB 機構に拠出金を支出しており、IB 資格を有し 18 歳に達したものに「大学入学に関し高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者の指定」を行っている。IB プログラム受講者の実態、教育効果を明らかにすることは、拠出金支出のアカウンタビリティを明確にする上で必須の作業である。
- ・入試の多様化がすすみ、入試担当者に大学入学資格の知識や情報の集積が一層求められる中であって IB プログラムの日本国内での認知度は一部の大学を除き必ずしも高くない。IB の教育内容や水準を明らかにし周知することは、入試担当者への情報提供のみならず、国際的人材育成を企図する施策の資料として重要である。

④本研究に盛り込まれている主なデータ項目

- IB で獲得された能力
- 職業観
- 性役割観
- 日本人である根拠（血統、行動様式や思考形態、国籍）
- 国際意識・日本人観
- キャリア・パス（国内外の進学大学の選択理由など）
- 語学力
- 将来設計

⑤今後の研究予定

- 国際バカロレアに関する資料収集の継続
- 2年間の追跡調査対象者について3年後に下記内容に係る追跡調査を希望：
：大学生活、就職活動、国際バカロレア・プログラムの意義、キャリア意識、高校卒業後の意識の変遷、その後のキャリア・パス（研究費申請が前提）

⑥キーワード

- (1) 国際バカロレア (2) キャリア意識 (3) IB
 (4) 国際学校 (5) インターナショナル・スクール
 (6) 高校生 (7) ディプロマ・プログラム
 (8) インターナショナル・バカロレア

⑦本研究の研究報告書

- 『在外教育機関に学ぶ日本人高校生のキャリア意識－日本で育つ青少年との比較－』
 (平成16年度－18年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、研究代表者:岩崎久美子) 2007年3月.
- 相良憲昭・岩崎久美子編著、石村清則・橋本八重子・吉田孝著
 『国際バカロレア－世界が認める卓越した教育プログラム－』 明石書店
 2007年2月.

⑧関連する先行研究や参考となる研究等

- 文部科学省大臣官房国際課「国際バカロレアの概要」
 平成17年6月(改訂版).
- 岩崎久美子「心を育てる国際的なボランティアプログラム」pp. 119-134
 立田慶裕編『参加して学ぶボランティア』玉川大学出版部 2004年9月.
- 岩崎久美子:「国際バカロレアディプロマ取得者の大学との接続について」
 (吉田和文(研究代表者)、『国際バカロレア・プログラムの評価基準及び大学との接続に関する調査研究』(文部科学省委託研究報告書)2002年3月.
- 岩崎久美子:「国際バカロレアにおける「創造性・活動・奉仕」－社会性を育むカリキュラム内容－」(相良憲昭(研究代表者)『国際バカロレア・プログラムにおける評価、研修システム及び国際教育の位置付けに関する調査研究』(文部省委託研究報告書) 2001年3月.
- 高野文彦・浅沼茂編『国際バカロレアの研究』(研究プロジェクト報告書)
 東京学芸大学海外子女教育センター 1998年3月.
- 相良憲昭「国際バカロレア制度」 中西晃編『国際理解教育における国際学校の教育』エムティ出版 1994年.
- 西村俊一『国際的学力の探求－国際バカロレアの理念と課題－』創友社
 1989年.
- Peterson, A.D.C., The International Baccalaureate: An experiment in International Education, George G. Harrap & Co. Ltd.1972.